

テキストにおけるスル・シタ形式の機能

金 美 仙

松 山 大 学
言語文化研究 第31巻第1号 (抜刷)
2011年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 31 No. 1 September 2011

テキストにおけるスル・シタ形式の機能¹⁾

金 美 仙

1. は じ め に

本稿の目的は、スル・シタ形式²⁾のテキストにおける機能を明らかにすることになる。スル・シタ形式は、現代日本語のアスペクト形式のひとつであり、シテイル・シテイタ形式と対立構造を形成しながらアスペクト体系を成している。テキスト的な機能、つまりタクシス³⁾をアスペクト形式に求めるのは、日本語ではアスペクト形式がタクシスを表すからである。つまり、アスペクト的な意味とテキスト構成機能とは表裏一体の関係にあるものであり、例えば、「動作の継続」を表すシテイル形式は、テキスト上の前後の動作⁴⁾とは「同時」関係を表すのである。「継続」というアスペクト的な意味はテキスト構成機能としては「同時」となるわけである。したがって、スル・シタ形式のタクシス性も、そのアスペクト的な意味との関係の中で解明されるべきである。以下で、小説の地の文に現れているスル・シタの終止形の用例を対象に考察を行う⁵⁾。

1) 本稿は松山大学 2009 年度特別研究助成金の支援によって書かれたものである。

2) 「スル」は、「たべる、いう、いく、さす、たつ、しぬ、はこぶ、すむ」などの、動詞の非過去形の形をさし、それらの過去形の形を「シタ」とする。

3) タクシスとは、テキストを構成するいくつかの動作間の時間関係を示す範疇である。工藤 (1995: 22) でも指摘されているように、Jakobson (1957) は動詞の文法範疇として、そしてマシロフ (1978) では、動詞アスペクトが担う、最も重要な機能としてとらえている。いくつかの動作間の時間関係というのは、外的な時間関係とはいえ、ダイクティックな関係を表さない点においてテンスと異なる。

4) 以降、動作の意味を、変化や状態などを含めて広くとらえて用いる。

5) 言語資料は、『新潮文庫の 100 冊』(新潮文庫 CD-ROM) のうち、日本作家による 1970 年代以降の小説 (10 作品) から 6,237 例 (スル 1,030 例、シタ 5,207 例) を収集した。

お、本稿では、スル・シタ対シテイル・シテイタの対立構造を形態論的なカテゴリーとしてとらえ、前者を「完成相」、後者を「継続相」と呼ぶことにする⁶⁾。

2. 先行研究のまとめ

スルとシタのアスペク的な意味に関する研究は、「タ」を助動詞として扱う伝統文法を継承する立場と、スルやシタをひとつの形式として扱う立場の、2つに大別できる。尾上(1982)、寺村(1984)、丹羽(1996)などでは、スルとシタのアスペク的な意味を別々にとらえ、それぞれ「未了」と「完了」、「未然」と「已然」、「未完了」と「完了」の意味を与えている。これらに対して、奥田(1977)をはじめ、仁田(1987)、益岡(1987)、工藤(1995)、金水(2000)、須田(2003)、日本語記述文法研究会編(2007)などでは、スル・シタを一元的にとらえ、それぞれ「ひとまとまり性」、「動きを丸ごと表す」、「動きの全体像」、「完成性」、「完成相」、「動きをひとまとまりとしてとらえる」という意味を与えている。つまり、スル・シタに対して概ね「ひとまとまり性」が認められているのである。

スル・シタ対シテイル・シテイタの対立構造を認める近年の研究では、アスペクトのテキスト構成機能を主張してきた。奥田(1988)や工藤(1989, 1995)、須田(2003)、日本語記述文法研究会編(2007)などでは、継続相は他の動作・状態との同時性を表し、完成相は他の動作・状態との継起性を表すことを明らかにした。これらの研究によれば、継続相は、動作・状態の「継続」を表すからこそ、他の動作・状態との「同時」を表し、同じように、完成相は、「ひとまとまり性」を表すからこそ「継起性」を表す、ということになる。すなわち、アスペクトとタクシスは相関するのであるが、特に工藤(1995:23)では、「タクシスは、アスペクトのもつ本質的機能である」と規定している。

6) 「完成相」、「継続相」の用語は奥田(1977)による。

さらに、奥田（1988, 1993, 1994）や工藤（1995）、須田（2003）などでは、完成相の意味として「ひとまとまり性」のみならず「終了限界達成性」をも指摘している。ただし、両意味の関係に関する立場は必ずしも一致しない。工藤（1995）では「ひとまとまり性」と「終了限界達成性」はひとつの意味のバリエーションであるが、奥田（1988, 1993, 1994）や須田（2003）は異なる意味として認識されている。アスペクト的な意味はタクシス性と連動しているので、「ひとまとまり性」と「終了限界達成性」の意味規定や相互関係はテキスト構成機能に関わってくる。

3. 問題提起

次の(1)は「限界達成性」を表す場合であるが、(2)は(1)と同じ用法に見えない。

(1) 「誰にでも最初というものはある」と大畑は悠然と肯いて、【言った】。伸子は助けを求めるように、純子を【見た】。純子は処置なし、とでも言うように肩を【すくめた】。(女)⁷⁾

(2) 彼の母親に会い、友人に会い、教師に会い、ジムの関係者に会い、ボクシングの専門家に会い、もちろんエディにも会った。ある人は性格だと【言った】。生来の怠け癖が敗北によってあらわになっただけである、と。ある人は血だと【言った】。黒人との混血児には彼のような飽きっぽい性格が多いのだ、と。(一)

(1)の場合は、3つの動作【言う】、【見る】、【肩をすくめる】が連鎖して起きている。動作【見る】は、先行動作【言う】が終了してから起きている、動作【肩をすくめる】は、動作【見る】が始まってから起きていることが読み

7) () の中は作品名の最初の一字。以下同。

とれる。すなわち、【言う】の完成相は「終了限界達成」を表し、2つの動作は継起関係にある。そして、【見る】の完成相は「開始限界達成」を表し、後の動作と部分的な同時関係にある。動作間の時間関係は、単なる前後関係ではなく鎖のようにつながっていて、読み手は舞台のシーンのような具体的な場面を描くことができる。物語の筋は具体的な場面によって進行していくのである。本稿では、このような、具体的な時間関係を「先行・後続」関係と呼ぶことにする⁸⁾

これに対して、(2)の2つの動作【言う】の間にはそのような時間関係も見られない。もっとも現実世界では、2つの動作は時間差をおいて発生しているはずである。しかし、言語表現において2つの動作は単に列挙して表されているに過ぎない。完成相の派生的な意味とされる、パーフェクト性や反復性でもないのである。日本語記述文法研究会編(2007:19)では、スル・シタは「文連続」において継起的な関係を構成するとした上で、ただし「出来事をリストアップするような文脈」では、その継起的な関係を構成しないことがあるとし、限界達成性とは異なる、完成相の用法があることを指摘している。(2)では、2つ動作【言う】がまさにリストアップされているだけであり、それぞれの完成相は継起性を表すこともなければ、動作の時間的な内部構造を分割して表すこともない。動作を丸ごととらえて、その動作があったことを表しているだけである。

以上のことから、本稿では、完成相には限界達成性とは異なる、もうひとつの用法を認めるべきであると考え。この、もうひとつの用法は、動作の時間的な内部構造を分割しないで、丸ごと動作自体をとらえる、ということから《ひとまとまり性》と呼ぶことにする。工藤(1995)では、ひとまとまり性と限界達成性との関係を、焦点の違いによるバリエーションととらえているの

8) 奥田(1988, 1993, 1994 a, 1994 b)では、「先行・後続」という用語に対する定義は行っていないが、「具体的な時間の前後関係」を指していると、本稿では解釈する。すなわち、本稿では、例えば時間的なインターバルのある2つの動作は、時間の前後関係にはあっても、先行・後続関係として考えない。

で、工藤（1995）の「ひとまとまり性」と本稿でいう「ひとまとまり性」とは、指す意味が異なる。また、須田（2003）では、(2)のような用法に対して、「全体的な事実の意味」と規定しているが、限界達成性に対するテキスト構成機能に継起性を認めながらも、「全体的な事実の意味」に対するそれに関しては言及がない。限界達成性に対して与えられている「継起性」とは異なる、「ひとまとまり性」に対する機能をも与えるべきである。以下で、ひとまとまり性の考察に入る前に、限界達成性について簡単に触れておく。

4. 完成相が限界達成性を表す場合

アスペク的な意味の実現には動詞の語彙的な意味が大きな要因として作用する。継続相（シテイル・シテイタ）が表す「継続」という意味は、動詞の語彙的な意味によって「動作の継続」として現れるか、「変化結果の継続」として現れる。一方、完成相（スル・シタ）が表す「限界達成性」は、動詞の限界性⁹⁾によって「終了限界達成性」として現れるか、「開始限界達成性」として現れる。¹⁰⁾ 限界達成性に関しては、奥田（1993, 1994）、工藤（1995）、須田（2003）などを簡単にまとめておく。完成相が「終了限界達成」を表すか「開始限界達成」を表すかに関しては、限界動詞（変化動詞や一部の動作動詞）の完成相は「終了限界達成」を表し、無限界動詞（一部の動作動詞や状態動詞）は「開始限界達成」を表す。

(3)は動作動詞、(4)は変化動詞の例であるが、いずれも語彙的な意味の中に限

9) 限界性とは、動詞の語彙的な意味に内在されている *terminal point* (限界点) に関する概念である。「いすを作る」のように限界性のある出来事は、動きが限界点に達すれば自動的に終了し、出来事は実現する。反面、「歩く」のように限界性のない動作は、動きが任意の時点で終わっても出来事は実現する。限界性に関する用語として、*telic/atelic* (Garey 1957, Nehls 1975, Comrie 1976), *bounded/non-bounded* (Allen 1966), *conclusive/non-conclusive* (Jespersen 1927), *terminative/non-terminative*, *limitedness* などが用いられているが、本稿では限界動詞 (*telic verbs*), 無限界動詞 (*atelic verbs*) と呼ぶことにする。

10) 動詞分類は、奥田（1994）や工藤（1995）に準ずる。動作動詞、変化動詞、状態動詞という、奥田（1994）の3分類に対して、工藤（1995）では、限界性によって動作動詞をさらに‘主体動作・客体変化動詞’と‘主体動作動詞’とに細分している。

界時点がふくみこまれている，限界動詞である。それぞれの完成相は終了限界達成性を表し，先行動作に対する継起性を表している。

- (3) それから彼女はピンク色のハンドバッグを開けて封筒に入った銀行小切手を私にくれた。そこには私の予想よりは少し多めの金額が記入されていた。私はそれを財布に【入れた】。(世)
- (4) 地下でシャワーを浴び，サッパリとした顔で内藤が上がってきた。タオルで前を押さえただけの丸裸である。そのままの姿で，リングの横にある秤に【のる】。そして目盛を読んだ。(一)

一方，(5)は状態動詞，(6)は動作動詞の例であるが，いずれも無限界動詞である。それゆえ，完成相において終了限界達成性を表さない。先行動作との継起関係の中で開始限界達成性を表しているのである。もっとも，無限界動詞でも外的な限界が与えられている場合は終了限界達成を表す。

- (5) 釜山から帰って三週間ほどたった頃，私は久し振りに内藤と会った。顔を合わせると，俺もパンチ・ドランカーになっていくようだ，といきなり言った。なぜケリをつけるべく闘い切らなかったのだ，と詰問しようとしていた私は，先制パンチを浴びて【うろたえた】。内藤はさらに，眼がかすむし，一試合ごとに馬鹿になっていくような気がする，と言った。(一)
- (6) 鯨さんはコートの襟をたて，その下で背中を丸めてのたりのたりと体を横にゆするようにして歩いた。「あのよオ」と，鯨さんが歩きながら【言った】。(新)

以上のように、いくつかの動作が鎖のようにつながって、具体的な場面を形成する場合、完成相は与えられた動作の特定の局面を取り出して表す。先行動作の終了は後続動作の発生によって裏づけられ、同じように、後続動作の発生も先行動作との関係の中で確認されるのである。そして、読み手は舞台のシーンのような具体的な場面を描くことができ、物語の筋が進行していくテキストが構築される。なお、シタ用例 5,207 例のうち約 70%, スル用例 1,030 例のうち約 30% が限界達成性の用法であった。

5. テキストにおける「継起性」の現れ方

先行研究では、完成相のテキスト構成機能として「継起性」が主張されているものの、具体的な考察が十分に提示されていない。そこで、本稿ではテキストにおいて「継起性」はどのように実現されているのか具体的に検討することにする。

5.1 先行動作が終了している場合

5.1.1 先行動作が限界動詞の完成相に表されている場合である。(7)~(8)の場合、それぞれの先行動作「赤くなる」や「出る」は完成相に表されている。

(7) 彼女は僕の顔を見て少し驚いたようで、頬が一瞬赤くなった。「ごめんなさい」と彼女は僕に【言った】。(世)

(8) 四月四日の朝の光が、ほの白くあたりに流れはじめようという時刻だった。もう我慢できなくなった彼は起きあがり、足音をひそめて外に出た。内城壁の上に【登る】。さらに、内城壁の要所を押さえる、塔の一つにも登ってみた。(コ)

これら先行動作をとらえているのは変化動詞であり、その変化動詞の完成相

は、「赤くなる」や「出る」という変化が実現したことを表している。そして、(7)~(8)の動作「言う」や「登る」は、それぞれの先行動作が終わってから起きていることが読みとれる。すなわち、動詞「言う」や「登る」の完成相は、それぞれの動作が先行動作に代わって起こるといふ、継起的な意味を表しているのである。【言う】や【登る】の動作が継続相の動詞にさしだされれば、先行動作が終了しているとしても、その終了を受けて起こるといふ、継起的な意味は表されないのである。

なお、先行・後続の関係にある2つの動作は、テキストの記述において必ずしも連続して位置されない。(9)に見るように、動作【答える】の先行動作は「挨拶する」であるが、物語の筋の進行とは無関係なテキストが挿入されていて、2つの動作の、テキスト上の位置は離れている。

- (9) 純子は、ちょっと意外な顔で、自分より年下の先輩に【挨拶した】。

「どうしたの？ 遅いじゃない」

桑田伸子は十九歳だが、高卒でここへ入社しているので、勤続三カ月の純子よりは先輩に当たる。

万事が派手で、楽天的で、都会っ子の純子とは正反対に、伸子は至って地味な、目立たない娘だった。

地方から一人で上京して来ているせいもあるだろうが、どこか所帯やつれたような、いつも疲れた印象がある。それでいて、大人びているというわけではなく、絶えず気弱に気を使っている所は、頼りなげで、大人になり切れていない感じだった。

美人というわけでもなく、体つきも中肉中背で、総てが控え目にできている。

「おはよう、純子さん……」

伸子は、泣き笑いのような、無理に作った笑顔で【答えた】。(女)

次は、先行動作が動作動詞の限界動詞にさしだされている場合である。

(10) 私は頭を振って懐中電灯をわきにはさみ、ナイフの刃を収めてポケットにしまった。とんでもない一日になりそうな【予感がした】。(世)

(11) もちまへの闘志と馬力で前進に前進を重ねていた原田は、関と同じようにメダルをロープ際に追いつめた。瞬間、メダルの鋭い右が原田の顎をえぐった。原田も、関と同じく、その右アッパー一発でキャンバスに【沈んだ】。(一)

(10)の先行動作「しまう」をさしだしている動詞は、限界性が含みこまれている動作動詞である。一方、(11)の先行動作「えぐる」は瞬間的な動作である。いずれの場合も、「予感する」、「沈む」の完成相動詞は、それぞれの動作が先行動作に代わって継起的に起こっていることを表している。

5.1.2 先行動作が従属節の中に表されている場合がある。従属節に現れる述語の形式はさまざまであるが、もっとも多く現れている例をいくつか挙げておく。

(12) 拭き終り、ぎんが床に入ると母は湯を捨てに【行った】。(花)

(12)の場合、先行動作は「…すると」という従属節の動詞に表されているが、完成相の動詞にさしだされている後続動作【行く】は、先行動作「入る」に代わって行われていることがわかる。

さらに、(13)~(16)に見るように、先行動作が中止形や「…したあと」などの従属節の動詞に表されている場合もある。いずれの場合も、後続動作をとらえている完成相の動詞【崩れる】、【閉める】、【見詰める】、【言う】は、それぞれの

動作が先行動作の完結を受けて継起的に起こっていることを表している。

- (13) 堀畑はいきなり、左、右、とストレートを繰り出した。しかし、いずれも簡単に腕でブロックされ、さらに続けざまに放った左フックも空を切り、堀畑の体勢は大きく【崩れた】。(一)
- (14) 二百羽のヒヨコは夜が更けてもひっきりなしに騒いでいるので、ガラクタを引っぱり出し、押し入れの中に入れて襖を【閉めた】。押し入れの中でヒヨコたちは一晩中ないていた。(新)
- (15) 尚中は万年の添書を読み、あらかじめ門下生の記した予診に目を通したあと改めてぎんを【見詰めた】。尚中の後ろには十人近くの若い塾生達が並び、尚中の診察を見学していた。(花)
- (16) 松林の中で、多少は涼しいかも知れないが、「避暑」とはどういう意味かと三和が思っていると、家へ着くなり、山本が、裸になれと【言う】。(山)

5.1.3 先行動作が言語形式化されていない場合もある。先行動作が言行為である場合、発話の内容のみが記述されていて、言行為自体は言語形式として表現されていない場合がある。

- (17) 「私がです」
 「あなたが」
 ぎんは大きく【うなずいた】。荻江は近視の眼をさらに近づけてぎんを見詰めた。(花)

- (18) 「理事のみなしゃん。四次元の大泥棒ブンに対する策はございませ
んか?」

タンガニーカのドンドコ・ボコンボコ理事が【立つ】。(ブ)

(17)や(18)では、発話内容である「あなたが」や「理事のみなしゃん…」が記述されているだけで、例えば「…と言った」のように、発話行為が「言う」という言語形式で表現されていない。しかし、完成相という文法形式が表す時間関係は、先行動作との時間関係であり、その動作をとらえている言語形式との時間関係ではない。このことから、動作の内容のみが表現されている場合も、本稿では、先行動作として扱っている。

5.1.4 以上のように、先行動作は、終止形の完成相や従属節の動詞など、さまざまな形式で現れるが、いずれの場合も、後続動作との間に時間的なインターバルがなく、2つの動作は継起的な関係にある。このように、先行・後続という具体的な時間関係にある2つの動作において、完成相は、その動作が先行動作に替わって起こっていることを表していて、すなわち「継起性」の機能を果たしているのである。この機能は、継続相では表すことができず、完成相固有の役割である。

5.2 先行動作が終了していない場合

先行・後続関係にある2つの動作の場合、完成相動詞にさしだされている動作は、先行動作が終わらないでまだ続いている間に起こる場合がある。そして、先行動作の現れ方は、終止形の動詞の完成相または継続相の場合もあれば、従属節の動詞の形の場合もある。

5.2.1 終止形で表れている先行動詞が終わらないでつづいている状態で後続動作が現れている場合、その先行動作をさしだす完成相の動詞はすべて無限界

動詞である。

- (19) 鯨やんはコートの襟をたて、その下で背中を丸めてのたりのたりと体を横にゆするようにして歩いた。

「あのよオ」

と、鯨やんが歩きながら【言った】。(新)

- (20) 私たちは六本木のステーキ屋で向かいあっていた。肉を注文しおわると、ウエーターは飲物はどうするのかと訊いてきた。私は内藤を見た。すると、彼は丁寧な口調でウエーターに【言った】。

「オレンジジュースを下さい」(一)

(19)~(20)の先行動作「歩く」や「見る」は、完成相動詞にさしだされているが、それぞれの後続動作「言う」は、先行動作の進行中に起こっている。動詞「歩く」や「見る」は無限界動詞であり、完成相において〈開始限界達成性=動作の始まり〉を表す。そして、後続動作が行われている間にも、先行動作は終わることなく続いていて、先行・後続する2つの動作は部分的な同時関係にある。

このように、完成相の動詞は、先行動作が終わらないでつづいている間に現れる後続動作をさしだす場合もあるが、これは、完成相の文法的な特徴によるものでもなければ、完成相の形をとる動詞の語彙的な意味によるものでもない。先行動作との関係という、テキストの環境の中で区別される機能である。完成相にとっては、先行動作に対して具体的な時間関係を形成する、後続動作の発生を表すという意味において、「継起性」のバリエーションとして考える。いずれにせよ、部分的な同時関係にある動作も具体的な場面、つまり先行・後続関係を形成し、部分的に重なる形で鎖のようにつながっていて、物語の筋は進行していくのである。

5.2.2 先行動作が継続相動詞にさしだされている場合もあり，後続動作の完成相とは部分的な同時関係を形成する。

(21) そのうち二人はあたりの空気におかまいなく，机の上にかがみこんでなにか熱心に作文のようなものを書いていた。その男たちが，その日ぼくと同じように入社試験にやってきたのだな，ということはすぐ【わかった】。(新)

(22) 画面にはふたりの人間がうつっていた。

東洋人らしく，ふたりとも目が細い。一方は細い上にちっこい目で，一方はたれ目であった。試写室の中には日本人がひとりいたが，彼は，なつかしそうに【叫んだ】。(ブ)

(21)の場合，先行動作「書く」が行われているところに，後続動作【わかる】が実現している。同じように，(22)では，動詞「うつる」の継続相が，その変化後の状態を表していて，その状態の継続中に，後続動作【叫ぶ】が起こっている。いずれの場合も，後続動作の出現後も先行動作は終わらないでまだつづいていて，先行・後続の動作は部分的な同時関係にある。

5.2.3 先行動作が従属節の動詞にさしだされている場合，その従属節の動詞は，主に「…していると，…しながら，…しているうちに，…して，…したが」などの形をとることが多い。

(23) どうしてなのだろう，と不思議に思って見ていると，社員たちの視線が，時おり高根の背広のポケットのあたりにちらちら動いている，ということに【気がついた】。(新)

- (24) 私が何と答えればいいのか迷っているうちに我々はエレベーターの前に【**出た**】。(世)
- (25) フン先生は、ブンの話に耳を傾けながら、インスタントコーヒーを【**入れた**】。(ブ)
- (26) 並べられた焼き魚、カマボコ、刺し身を見て、荒井は目を【**疑った**】。
(女)
- (27) 椅子に座って、部屋の中を見渡すと、入り口の所で、立って見たのと、また違う部屋のような【**気がする**】。(女)

(23)~(27)に見るように、先行動作をさしだしている動作の形はさまざまであるが、すべて無限界動詞である。すなわち、先行動作をさしだす動詞が無限界動詞であれば、終止形で現れようが従属節で現れようが、完成相は先行動作と部分的な同時関係を形成する。そして、部分的同時関係にある先行・後続動作は具体的な場面を構成しながら物語の筋が進んでいることを表している。

5.2.4 先行動作が言語形式化されていない場合もある。(28)~(29)では、言行為の先行動作が言語形式に表されていない。先行・後続の動作関係は、(28)では「部分的な同時」、(29)では「継起」となる。

- (28) 大畑は、尾島から渡されていたリストを見ながら、「私は全社員についてのデータを提供してもらい、十分に検討しました。その結果、誠に遺憾ながら、次の人たちには……」
【**緊張が漲った**】。(女)

- (29) 「重役とはどういう意味だ？ 金持のことか」

山本が聞くと、

「そうですね。それもありますが、私の言うのはあなたは押しの一手の人だということです」

皆が又わっと【笑う】。(山)

5.2.5 テキストの記述において、完成相動詞が場面の最初の動作をさしだしている場合がある。

- (30) 「畜生！ どうなってるんだ！」(女)

尾島は机をドンと【叩いた】。

「そうカッカなさっても仕方ありませんよ」

と元総務部長の柳が言った。

- (31) 私は内藤と一緒にジムを【出た】。汗の匂いが充満している蒸し暑いジムを逃れて、夜のやさしい風に当たりながら線路際の道を駈に向かった。(一)

(30)～(31)の場合、動作「叩く」や「出る」は、それに先行する動作がなく、場面の最初の動作である。このように、場面のイニシャル動作をさしだしている完成相の機能も本稿では「継起」の用法として扱う。

5.2.6 以上のように、先行動作が終了していない状態で、完成相動詞に差し出される動作が現れる場合があるが、先行動作を表す動詞は基本的に無限界動詞である。ただし、先行動作を表す文法形式はさまざまであり、文末述語の動詞にさしだされる場合もあれば、従属節の動詞にさしだされる場合もある。このような先行・後続関係にある動作は部分的な同時関係を形成し、すなわち具

体的な場面が構成され、それによって物語の筋は進行していくのである。

5.3 テキストにおける「継起性」の現れ方のまとめ

動作が他の動作と具体的な時間関係を形成するというのは、2つの動作が単に時間順に起こっているのではなく、鎖のようにつながっていることを意味する。そして、動作間に時間的なインターバルがなく、鎖のようにつながっているからこそ、舞台の場面のような状況が描かれる。つまり、読者はこのようなテキストを読んで、具体的な場面を描くことができるのである。また、鎖のようにつながっているいくつかの動作は、時間的に先行・後続関係にあるだけに、物語の筋の進行を表している。すなわち、完成相は、具体的な場面を形成しながら物語の筋を進行させるいくつかの動作の間の具体的な時間関係を表すのである。

6. 完成相がひとまとまり性を表す場合

奥田（1993：53）や工藤（1995：88）でも指摘されているように、動作の時間的な内部構造の分割が他の動作との先行・後続関係の中で実現するものであれば、他の動作と先行・後続関係を形成しない動作をとらえている完成相は限界達成性を表さないだろう。本稿では、限界達成性とは異なる完成相の意味を、動作の時間的な内部構造を分割しないという点から「ひとまとまり性」と呼ぶことにする。以下で、ひとまとまり性の現れる条件やテキスト上の機能を検討する。

6.1 ひとまとまり性の現れる条件

完成相がひとまとまり性を表すか否かは文脈に頼っている場合が多いが、一部の動詞はその語彙的な意味からして他の動作と先行・後続関係を形成しないことがある。

- (32) 原は孤児だった。生まれるとすぐ、福岡市の郊外にあるカトリックの女子孤児院にあずけられ、そこで【育った】。(ブ)
- (33) 部屋を借りると、ぎんはただちにそこから麴町三丁目の国学者、井上頼圀の私塾に【通った】。(花)

(32)や(33)の動詞【育つ】や【通う】は、例えば「歩く」「食べる」などの動詞と違って、その語彙的な意味において具体的な動作を表さない。長期間にわたって行われるさまざまな動作の意味を抽象化して表す動詞である。すなわち、それぞれの前の動作「あずけられる」、「借りる」に対して、継起関係にある具体的な動作を表すことができないのである。単に時間順にある活動なのである。「過ごす、尽くす、見学する、入居する、建てる」などの動詞も同様である。

他には、テキストレベルの文脈においてひとまとまり性が確認される。その文脈において、いくつかの動作の間に時間順や逆順といった、何らかの時間関係が見られる場合(6.1.1)もあるが、いかなる時間関係も成立しない、単に羅列されている場合(6.1.2)もある。

6.1.1 何らかの時間関係が見られる場合

6.1.1.1 (34)の場合は、【行く】、【訪問する】、【始まる】の動作は、単に時間順に起こっているだけである。

- (34) その日、山本五十六は、松平大使と初協議を行なってから、連れ立って、英国の外務大臣、海軍大臣のところへ挨拶に【行った】。翌十月十八日には、アーンリ・チャトフィールド軍令部長を【訪問した】。これは、いずれも、単なる儀礼的訪問であったと思われる。山本の正式の仕事は、それから五日後、十月二十三日、ダウニング街十番の英国首相官

邸で開かれたイギリス側との初会合、同じく二十四日、アメリカ代表部の宿舎ホテル・クラリッジスで開かれた米国側との初会合を以て【始まった】。(山)

これら3つの動作間には時間的なインターバルがあり、具体的な時間関係が形成されないのである。もっとも、(1)の場合も時間的なインターバルはありうる。しかし、それは現実世界における物理的な時間のインターバルであり、むしろそのインターバルがまったくないほうが不自然であろう。言語表現が現実世界に基づいているのは確かであるが、そのまま映し出すわけではない。(34)の場合、動作が特定の時点において行われたこと、出来事としてあったことは読取れても、始まりや終わりといった、動作内部の局面が取りだされているわけではない。

奥田(1993:48)では、少なくともこの2つのタイプの違いに気づいている。完成相は「限界へ到達した動作・変化」、または「ひとまとまりの動作」を表すとし、(1)のタイプを前者の例として、(34)のタイプを後者の例として挙げている。また、須田(2003:51)でも、「テンズ的に、過去の動作と現在の動作と未来の動作は、時間的な順番にはあるが、これは、たがいに時間的に関係づけられていないので、継起的な関係はむすんでいるとはいえない」としている。一方、工藤(1995:244)では、(1)と(34)のタイプをそれぞれ「接触的継起関係」と「非接触的継起関係」ととらえている。しかし、「継起関係」に「非接触性」を認めるとしても、(2)のように動作の単なる羅列、(35)のように時間の流れに逆行して現れる過去の動作、その他(40)~(41)のような場合(後述する)は、「非接触的継起関係」すら形成しないのである。

さらに、須田(2003:28-29)では、完成相が動作を、時間的な内部構造を分割しないでとらえるということは、動作がいわゆる‘基準時点’に関係づけられていないことを意味するとし、完成相のこのような意味を‘全体的な事実の意味’と呼んでいる。しかしその一方では、‘全体的な事実の意味’のひと

つであるという‘全体的な出来事の意味’と‘基準時点’との関係について「特別なし方で、すなわち、分割をゆるさない、ひとかたまりの動作全体として、過去や未来に設定された基準時点と、あいまいに、ほのめかしの関係しているといえる」としている。その根拠として「時間の状況語によって、動作のおこった時点をしめすことができ、また、過去や未来のおなじ時点における継続相との対立」を挙げている。しかし、もしそうだとすれば、他の動作との継起的な関係もまた、あいまいに、ほのめかしの成立しなければならないのではないだろうか。本稿では、時間の状況語が示されていても、それはひとまとまりの動作があった時点であると考え。例えば、「その日は午後3時にお昼を食べた。帰りも遅くなり、夕飯は夜9時に一人で食べた。」の場合、「午後3時」という時間の状況語が示されても「食べる」の完成相はひとまとまりの動作を表しているにすぎない。

6.1.1.2 (35)や(36)のように、時間の進行に逆行して現れている過去の動作も前の動作と継起関係を形成しない。

(35) 生徒達はまた裕から単衣に衣装替えをした。緑の中を生徒達が駆けて行く。この年齢頃で自分は求められて、稲村へ【嫁にいった】。芝生に坐りながらぎんは来し方を思い起こした。(花)

(36) 私は、もう二度とお嫁に行く気などありません

「私は初めからそう考えていました」

荻江ははっきり言いきった。ぎんの八つ上の二十七歳で、当時としてはすでに婚期を逸していた。男衆より学問が好きで、そちらに気をとられているうちに婚期を逸したと万年は言った。(花)

(35)の動作「嫁に行く」は、「生徒達が駆けて行く」動作の次に起こったわけ

ではなく、過去の出来事である。同じように(36)の動作「言う」は前の動作や状況を引き継ぐものではない。動作「言う」は、前の動作「言いきる」と具体的な時間関係を形成しない、過去の出来事であり、その完成相は、「言う」という動作の時間的な内部構造に介入しない。すなわち、完成相は、ひとまとまりの動作を過去の出来事として表しているのである¹¹⁾

6.1.2 動作間に何の時間関係も見られない場合

テキスト上における前後の動作間に何の時間関係も形成されていない場合もある。例えば(2)のように動作が単に羅列されている場合 (6.1.2.2) や、同一動作が異なる視点から重複記述される場合 (6.1.2.3), 同じ動詞が2回記述されている場合 (6.1.2.4), いくつかの動作が一括してとらえられている場合 (6.1.2.5) には、完成相が表す動作と前の動作との間にいかなる時間関係も成立しない。

6.1.2.1 完成相動詞が習慣的、反復的に行われる動作をさしだしている場合は、前後の動作と継起的な関係を結ばない。

(37) そう言うと、彼は注意を再びチェス盤に戻した。そのチェスは僕の知っているチェスとは駒の種類と動き方が少しずつ違っていたので、ゲームはだいたいいつも老人が【勝った】。(世)

(38) だから、彼らは一日の練習が終わると、汗にまみれたバンデージをよく洗い、干しておく。翌日、乾いたそれを再び【使う】。(一)

11) このような、他の動作と具体的な時間関係を持たない、過去の出来事を表す完成相の意味は、テンスの観点から見れば、鈴木 (1979: 49) で指摘されている、現在からきりはなされたという意味の「アオリスト的なニュアンスをもった過去」に相当するものである。

(37)の場合、下線で示した動作「戻す」は1回の動作であるのに対して、「勝つ」は反復の動作であり、先行動作と交替して起こったものではない。一方、(38)では、動作「使う」や前の動作「干しておく」はいずれも反復の動作であり、具体的な場面を形成しない。

6.1.2.2 次の(39)に見られる前後の動詞「並べる」と「手を貸す」との間にも何ら時間関係が見られない。過去の動作でもなければ、時間順に起こった動作でもない。強いて言えば、ただ羅列されているだけである。そして、物語の筋の進行に参加することなく、単に、前の動作に対して付随の情報を与えているだけである。3. で挙げた(2)も同じタイプである。

(39) 木造の防柵の外側に、皮革と羊毛をつめた袋を並べる。砲弾が当たった時の衝撃を、少しでも弱めるためだった。防柵の上には、土をつめた樽を並べる。これは、柵を少しでも高くするためだ。この作業には、戦闘員だけでなく、女たちまでが【手を貸した】。(コ)

6.1.2.3 次の(40)や(41)では、同一動作が異なる視点から、異なる側面で重複記述されている。

(40) 「ということは」と言って、彼女は爪先で前歯をコツコツと叩いた。少くともそんな【音がした】。(世)

(41) 日本政府は、混乱に陥った。謂わば、何が何やら【分らなくなった】。頼りに思っていたドイツに裏切られた。(山)

(40)の場合、同じ動作が「私」という登場人物の視点から書き直されているだけである。同じように、(41)の「混乱に陥る」と「わからなくなる」は同じ動作

が異なる表現で表れているにすぎない。いずれにせよ、これら前後する動作間に先行・後続という具体的な時間関係は見られない。

6.1.2.4 同じ動作が同じ動詞で2回記述されている場合もある。

(42) 太郎は古本屋へ寄り、漫画本を三冊買った。相手のことを考えずに自分の好きなのを【買った】。(太)

(43) しかし私がその救済にたどりつく前にエレベーターの扉が開いた。扉は何の前兆もなく何の音もなく、するすると両側に【開いた】。(世)

(44) 山本はそれに一々返事を書く。

賭け事に忙しいから、宵のうちは書けない。深夜か夜明けに、手紙を書いて書類を調べる。

一体、山本五十六はどうしてあんなに手紙を書いたのだらうと言う人がある。

山本は孤独で、戦前も戦中も、心の中は常に淋しかったのだらうという説もあり、やはり一種の人気取りではなかったのかという説もあるが、とにかく、小学生の手紙にでも必ず返事を【書く】。(山)

(42)~(44)では、「買う」、「開く」、「書く」という動作が繰り返し書き表されている。これらの動作をさしだす完成相動詞は、前の動作に後続して起こっていることを表しているわけでもなければ、動作の始まりや完結を表しているわけでもない。(42)も同様であり、後の動作【買う】の完成相は、前の動作「買う」に対してどのような漫画本を選んだか、あるいは選んだ基準といった情報を与えている。(43)では、扉の開き方を説明するために同じ動詞が繰り返し記述されている。同じように、(44)では、2回記述されている動詞「書く」は、いずれの

場合も、その完成相は、反復的な動作をとらえているが、2回目に繰り返し記述されている「書く」の完成相は、「小学生の手紙でも」という具体的な情報を与える。すなわち、それぞれの完成相の動詞は、動作をひとまとまりとしてとらえ、前の動作の行われ方や動作の具体的な内容などの付随情報を与えるという〈説明〉の機能を果たしているのである。

6.1.2.5 いくつかの動作が一括してとらえられ完成相動詞にさしだされる場合も、動作間に先行・後続関係は形成されない。

(45) 私は目を閉じて、眼鏡のレンズを洗うように右の脳と左の脳をからっぽにした。それから両手をズボンのポケットからひっぱりだして手のひらを広げ、汗を乾かした。それだけの準備作業をガン・ファイトにのぞむ前の『ワーロック』のヘンリー・フォンダみたいに手際よく【すませた】。(世)

また、(45)では、【すませる】の完成相は、前の3つの動作「目を閉じる」、「からっぽにする」、「乾かす」を一括した動作としてとらえていて、〈ひとまとまり性〉を表している。「乾かす」と【すませる】の間には何の時間関係も成立しないのである。3つの動作の行い方について「手際よく」という付随情報を与えるという説明の役割を果たしている。

(46) 〈それを服の上から着て下さい〉と彼女は言った。出来ることなら雨合羽なんて着たくはなかったが文句を言うのも面倒だったので私は黙って彼女の指示に【したがった】。ジョギング・シューズを脱いでゴム長靴にはきかえ、スポーツ・シャツの上から雨合羽をかぶった。(世)

(47) エレベーターで四階に上がった。床には病院のように、白いリノリュ

ームが張ってある。天井裏にかくしたスピーカーからは、低いヴォリュームで、ソフトな音楽が流れていた。長い廊下を歩きながら、ふたりは、むかしからの仲のよい友だちのように話す。

「長官、なんとすばらしい刑務所ではないか」

「わしもそう思う」

「全国の囚人たちが、この湘南刑務所へはいりたいといいだして、困りはしないのか」

「そんなこというはずもない」 (ブ)

(46)の場合は、「したがう」は、下線で示したいくつかの動作「脱ぐ」、「はきかえる」、「かぶる」を一括してとらえた出来事である。後の動作「脱ぐ」に対して先行している動作でもなければ、前の動作「言う」に対して後続して起こった動作でもないのである。テキスト構成機能の面でいえば、3つの動作を行うように言った「彼女」の命令に対する、主人公の態度を説明している。また、(47)では、「話す」は、前の動作「上がる」に後続して起こった個別の動作ではなく、後に続く、2人の言行為を一括してとらえた出来事である。2人の言行為の行い方が「仲のよい友だちのよう」であったという付随情報を与えているのである。

6.2 ひとまとまり性に対するテキスト構成機能

物語は、具体的な動作の描写だけではなく、作中人物や特定の動作、出来事、時間・空間的背景などについて何らかの情報を与える記述から成る。例えば、作中人物の性格や心理状態、思い出、他の人物との関係などは、具体的な動作の連鎖を描写することでは表しきれない。完成相は、ひとまとまり性を表すとき、テキストにおいては作中人物などに対する何らかの情報を与える働きをする。完成相が何らかの情報を与える対象は、作中人物、特定の動作や出来事、物語全体に大別できる。

6.2.1 特定の動作や出来事に対する付帯情報

(48)のように同一の動作が重複記述されている場合や、(49)のようにいくつかの動作が一括してとらえられている場合、そして(50)のように、同一の動作が別の視点でとらえられている場合、これらの完成相の例はすべて特定の動作に対する付帯情報を与える働きをする。

(48) しかし私がその救済にたどりつく前にエレベーターの扉が開いた。扉は何の前兆もなく何の音もなく、するすると両側に【開いた】。(世)

(49) 〈それを服の上から着て下さい〉と彼女は言った。出来ることなら雨合羽なんて着たくはなかったが文句を言うのも面倒だったので私は黙って彼女の指示に【したがった】。ジョギング・シューズを脱いでゴム長靴にはきかえ、スポーツ・シャツの上から雨合羽をかぶった。(世)

(50) そして、ひとつのことをコーチした。それは、ダッキングで相手のパンチをかわした直後に、逆に反撃する際の足の踏み出し方とパンチの出し方だった。相手の左を横へのダッキングで逃れたあと、踏み込んでそのボディに右フックを叩き込む。そのタイミングと、パンチの角度について、エディは【注意した】。(一)

(48)の場合、前の動作「開く」に対して、後の動作【開く】の完成相は、前の動作の開き方を説明している。また、(49)は、一見【したがう】という動作が前の動作「言う」に交替して起こっているように見えるが、【したがう】がさしめしているのは「脱ぐ」、「はきかえる」、「かぶる」の動作であり、「言う」に後続する動作は「脱ぐ」である。【したがう】の完成相は、3つの動作を一括した動作としてとらえながら作中人物（彼女）の指示を受け入れるという意味合いをもっていることを説明している。そして、(50)では前の動作「コーチする」

の詳細な内容を表している。

一方、(51)のように前の動作に対して過去の動作をとらえている場合や、(52)のように単に羅列して表している場合にも、特定の動作や出来事に対する付帯情報を与えているものがある。

(51) 「俺について書いてくれた、あの本、あるでしょ」私は歩みを止め、内藤の顔に視線を向けた。五年前、釜山から帰った私は、彼についてひとつの文章を【書いた】。(一)

(52) そして、一四七〇年、さらにエーゲ海の南下をつづけるトルコは、ヴェネツィアの海軍基地ネグロポンテに挑戦した。この戦いは、初年のトルコによるネグロポンテ占領からはじまって、以後十年余りもつづくことになる、トルコ、ヴェネツィア戦争の【端緒となった】。(コ)

(51)では発話内容に関する詳しい情報を、(52)では「挑戦する」が持つもうひとつの意味合いを説明している。過去の動作の出現の場合、物語の筋は逆行しているが、完成相のテキスト構成機能は時間性にあるのではなく、物語の筋の進行に必要な、背景的な情報を与えるところにあると考える。

以上のような完成相の用法は、情報別にタイプ化することはできないが、情報の対象が特定の動作や出来事であるという点で共通している。言い換えれば、完成相は他の動作や出来事に対して何らかの付帯情報があることを説明する機能を果たしていると言える。本稿では、完成相のこのような機能を《説明性》と呼ぶことにする。

6.2.2 作中人物に対する付帯情報

作中人物に対しては、その人物の履歴、他の人との関係、評価、習慣などについて説明されていることが多い。

次の2例の完成相は過去の動作をとらえているが、(53)では「ジェーン」という人物のバックグラウンドを、(54)では「私」と「若者」との関係を説明している。

(53) 大学院博士課程で教育学を専攻するジェーンは、ストリークを目前に見ながらそう言って首を横に振った。全裸の学生たちの走り回る同じキャンパスで、同じ街路で、数年前の彼女は警官隊の投げる催涙弾と【**闘った**】。(若)

(54) 私は日本語でそう言った。意味はわからないはずだが、彼は頷きながらにこにここと笑った。その若者とは私がニューオーリンズに着いた日に【**知り合った**】。(一)

また、(55)の完成相は「森川」という人物に対する評価を、(56)や(57)の場合は、それぞれの作中人物の特性を表している。いずれも、前の動作に対しては単に羅列されているだけである。

(55) 森川は酒をのむとそのハツタリが強くなった。しかし業界紙という闇の猛者たちがうごめく世界ではハツタリや野心というものが多少強くなると周囲に負けてしまう、というようなところがあったので、森川のそうした強気は我々若手にはかえって遅しく【**映った**】。(新)

(56) ファイター・タイプは、相手に接近し、パンチ力にまかせて、激しく打ち合おうとする。一方、ボクサー・タイプは、足を使い、相手との距離を充分にとり、動きをよく見て、カウンターを狙おうとする。エディは、どちらかと言えば、ファイターを【**好んだ**】。(一)

- (57) 「おっきい人ね。なんていうの名前、おしえて？」と、カウンターの
中の女は言った。四十代半ばといった年恰好で、喉の奥にひび割れがあ
るのではないかと思えるような、妙に耳ざわりな【声を出した】。(新)

さらに、(58)の完成相は反復の動作をとらえながら、作中人物の習慣を説明している。そして、(59)では、同じ動作がくりかえし記述されているが、前後の動作はそれぞれ反復の動作である。後の動作の完成相は前の動作に対してより詳しい内容を説明している。なお、反復性に関して工藤(1995:150)では「背景的な説明性」というテキスト構成機能を与えている。

- (58) 荻野家へ来る時、荻江はきまって庭先から【現れた】。(花)

- (59) 山本はそれに一々返事を書く。賭け事に忙しいから、宵のうちは書けない。深夜か夜明けに、手紙を書いて書類を調べる。～中略～山本は孤独で、戦前も戦中も、心の中は常に淋しかったのだろうという説もあり、やはり一種の人気取りではなかったのかという説もあるが、とにかく、小学生の手紙にでも必ず返事を【書く】。(山)

6.2.3 物語全体に関わるさまざまな情報

(60)～(62)では物語の空間的背景が、(63)では時代的背景が表されている。

- (60) この川のおかげで沿岸の要所要所には東京通いの大舟が碇泊し、往来する商人や客で宿場は【賑わった】。(花)

- (61) ジムの横を何台も電車が通過していく。そのたびに、ジムは揺れ、ガラス窓が【震えた】。(一)

- (62) 夕陽の見える日はあまりなかったけれど、そんな日は必ず日本のことを思い、郷愁の念にかられた。一月、二月には、夕陽はほぼ真西に【沈む】。(若)
- (63) 人々は惑い、そして幻滅を感じた。と同時に、それまでの目標を失ってしまった。アメリカの歴史を通して、その発展力は常にフロンティアの存在であった。初期においては、それは東部海岸地帯であった。YOUNG MEN, GO WEST! の合言葉と共に、未知の素晴らしい何物かがこの先にあるはずだ、という確信によって人々は西へ西へと【向かった】。(若)

(60)~(62)のそれぞれの完成相は、物語が展開される場所である沿岸の特徴、ジムの環境、アメリカ・ミシガンという場所の特徴を表している。そして、(63)の完成相は反復の動作をとらえながら、現在の風潮と関わる歴史的な背景についての情報を与えている。

一方、(64)や(65)は、前の動作に対して単に時系列的に起こっている動作を完成相が表している場合である。

- (64) スルタン・ムラードは、子を与えたこの女奴隷を特別に寵愛しなかったのか、マホメッドは二歳の時に、長兄が総督をしていた小アジアのアマシアの町に、母親と乳母とともに送られた。だが、その三年後、長兄が【死ぬ】。(コ)
- (65) 井出謙治大将と一緒に欧米旅行から帰国するとまもなく、大正十三年九月一日付で霞ヶ浦海軍航空隊付を命ぜられ、それから三カ月後には同航空隊の副長兼教頭に【なった】。(山)

いくつかの動作が時系列的に、時間順に起こっている場合、それが即ち物語の筋の進行である場合もあるが、背景となる場合もある。例えば、過去において時間順に起こっているいくつかの動作は、現在進行している物語の筋に対して何らかの背景的な情報となる。一方、現在の物語の筋を進行させるいくつかの動作の場合、物語の筋は進行しているとはいえ、(1)や(3)~(6)に見るような具体的な場面による進行ではない。時間順にあるだけの動作は舞台のシーンのような場面を構成しないのである。読み手にとっては、いくつかの動作があったという情報が与えられているだけである。

ところで、この種の完成相の用法は、須田(2003:28-29)では‘全体的な事実の意味’となる。6.1で述べたように、‘全体的な事実の意味’は限界達成性と違って、動作が‘基準時点’に関係づけられておらず、したがって完成相は「他の動作と継起的な関係にある動作をあらわすことができない」(p.29)という。しかしながら、この2つの意味を完成相の「個別的な意味¹²⁾」にまとめている。これは、「動作が基準時点に関係づけられることによって顕在化する内的な時間構造」(p.12)というアスペクトの定義と矛盾している。本稿では、アスペクト的な意味の本質は、「継続・同時」対「限界達成・継起」といった、継続相と完成相との対立構造にあり、ひとまとまり性はアスペクトの本質的な意味ではないと考える。

ひとまとまり性とは、動作の時間的な内部構造を分割しないで丸ごととらえるという意味ではあるが、必ずしも「始まりから終わりまでの全過程をとらえる」という意味ではない。始まりから終わりまでの全過程というのは、時間の内部構造を前提とした解釈である。しかし、6.1で見たように、ひとまとまり性とは内部構造自体に無関心なのである。完成相は、単に動作があったことを表し、他の動作や作中人物、物語全体に対して必要な背景的な情報を与えている。すなわち、完成相はひとまとまり性を表しながら説明性というテキスト構

12) 須田(2003)では、アスペクト的な意味を「個別的な意味」と「周辺的な意味」に区別している。

成機能を果たしているといえる。

7. まとめ及び今後の課題

語りのテキストを、いくつかの動作の連鎖からなる具体的な場面を描写する部分と、何らかの背景的な情報を記述している部分とに分けるとしたら、場面を構成する動作をとらえた完成相は限界達成性・継起性を表す。一方、背景的な情報となる動作をとらえた完成相はひとまとまり性・説明性を表す。本研究では、完成相には限界達成性とは排他的に異なる意味があることが確認できた。しかし、今回は小説の地の文を対象にしているが、アスペクト体系の中でより性格にひとまとまり性を位置づけるために、話し合いのテキストをはじめさまざまなテキストタイプへと考察を広げなければ成らない。今後の課題としたい。

用例を収集した資料

『一瞬の夏』 沢木耕太郎／『女社長に乾杯！』 赤川次郎／『コンスタンティノープルの陥落』 塩野七生／『新橋島森口青春篇』 椎名誠／『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 村上春樹／『太郎物語』 曾野綾子／『花埋み』 渡辺淳一／『ブンとファン』 井上ひさし／『山本五十六』 阿川弘之／『若き数学者のアメリカ』 藤原正彦（以上『新潮文庫の100冊』CD-ROM '95版（新潮社）に収録）

参 考 文 献

- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『ことばの研究・序説』 むぎ書房。
- （1988）「時間の表現(1), (2)」『教育国語』 94, 95 むぎ書房。
- （1993, 1994）「動詞の終止形(1), (2), (3)」『教育国語』 2.9, 2.12, 2.13 むぎ書房。
- 尾上圭介（1982）「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』 1-2, 明治書院。
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』, 岩波書店。
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』, ひつじ書房。
- 須田義治（2003）『現代日本語のアスペクト論』, 東京外国語大学博士論文。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版。

仁田義雄 (1987) 「テンス・アスペクトの文法」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』8, 情報処理振興事業協会.

日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法 3』, くろしお出版.

丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンスー独立文と連体節」『人文研究』48-10, 大阪市立大学文学部.

ユ・エス・マスロフ (1978) 「対照アスペクト論の原理によせて」.(菅野裕臣訳『動詞アスペクトについて (II)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』35, 1992).

益岡隆志 (1987) 『命題の文法ー日本語の文法序説』, くろしお出版.

森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3-12, 明治書院.

——— (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」『論集 日本語研究(→現代編)』, 明治書院.

Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.